

大震災後の秋祭りの行方

神仏に祈りをささげ、万物への感謝をあらわすと同時に、時間と知識を共有し地域固有の帰属意識をほぐんできた村祭り。担い手の継続が難しい現代においても、危機的局面に際したとき、人は地域とのつながりや再生する活力を祭りに求める。そんな祭りの秘めた力を東北で再確認する機会をえた。

想像をこえる出来事

わが国の農山漁村に暮らす人びとにとって、九月から一〇月にかけての秋は村祭りの季節である。笛や太鼓の音が響き、屋台が出てみこしが村のなかを駆けまわる。近年では、村の高齢化がすすみ祭りの担い手がすくなくなるとはいえ、これらの祭りが簡単に消えることはないであろう。

ところが、二〇一一年三月一日の大地震とそれともなう大津波に

よって、東北地方の太平洋岸の村や町の人びとにとっては想定外のこと起きてしまった。津波によって祭りに使う太鼓や笛や衣装などが流されただけではなく、担い手の暮らす家屋や担い手自身までもが流されたところもあるのだ。

わたしの知り合いが暮らす岩手県の三陸沿岸に位置する大槌町においても、事情は変わらない。この町は、大震災によって海岸に近い市街地域を中心に壊滅的な被害を受けたことで知られる。震災前には、毎年、九

月下旬に二日かけておこなわれる「大槌祭り」が最大のイベントであった。この祭りは町内にある大槌稲荷神社と小槌神社が中心となって商工会議所もかわり、鹿子踊りをはじめとして、虎舞や大神楽などの町内の伝統芸能が連なる。そのなかには、みこしをかついで川を渡る行事も含まれている。

祭りの力

わたしは、震災後の四月下旬から

部では鹿子踊りというように民俗芸能が盛んであり、現在では海岸部の子どもたちや若者たちも鹿子踊りに参加するようになっていた。その避難所は内陸部に位置することで津波の影響が少なかった点でより多くの被災者を受け入れることができ、東京からやってきたボランティアの協力もあって今回のイベントに至ったのである。

踊りは、午前一〇時の始まりを予定していたが、当初はおよそ一〇〇人の参加者のなかで二〇人以上は、カメラをかかえるメディア関係者であった。避難所に暮らす若者が口にした、「誰のための鹿子踊りなのか」ということばが印象に残ったほどだ。わたしも、まだ時期尚早なのではないか、被災者にはこの場まで来る余裕はないのかと不安がよぎった。ようやく一時ごろになって、鹿子の面をつけた者一五名、笛をもった者一五名、それに太鼓をかかえた者五名の総勢三五名の一行があらわれた。なかには、面をつけた四〜五歳の子どももいる。

踊りの時間は四〇分以上続いたが、力強く踊る姿に人びとは圧倒され、それに合わせた笛や太鼓の音色に酔い、会場全体がひとつになる思いであった。あたりをみると、観衆は二〇〇人をこえていた。

町の復興が祈願される鹿子踊り



ある日、例年九月におこなわれる大槌祭りの開催の可能性について小槌神社の宮司さんにわたしは聞いてみた。みこしをかつぐ人びとが身につける一〇〇着の衣装はすべて津波で流されたが、みこしが保管されている小屋は浸水していないという。例年のようにみこしをかついで川のかなかにまで入ることはできないけれど、何とか衣装をそろえて神社の付近でもまわりたいというのだ。祭りに対する意気込みが伝わってきた。

人と人の心をつなぐ

わたしはその後、幾度か被災後の鹿子踊りを見る機会に恵まれて、民俗芸能にはさまざまな人びとの心をつなぐ力があると確信するに至った。舞を見ていた老人や舞を演じる若者など地元の人たち、それに加えてボランティアやメディアの方の気持が一体になれる場であるのだ。このことからすると、町外に暮らす若者ももどってくるほど魅力的であるという九月の大槌祭りを期待する声も大きいかもしれない。現時点では、今年の九月下旬に祭りがおこなわれるのか否かは定かではないが、先頭を切って踊る鹿子たちを見る日が近いことを祈りたい。